

アナキズム理論の総括

とその展望のために

江原 健人

ふたたび君はめざむるか、あざけられた予言者よ！

あるいは復讐の声にいらえて

金の鞘からやいばを抜き放つか

蔑の鞘におおわれたその刃を？

|| レールモントフ「詩人」より ||

はじめに

マリイ・ルイズ・ベルネリは「われわれの運動は、過去のあやまりを卒直にみとめることよりも、盲目的かつ無定見な讚美によってさらに墮落し弱められるものと、わたしはかく信じている」と言っている。この論文はこのベルネリの「あやまりを卒直にみとめる」という立場を基礎にして、現代におけるアナキズムの問題を追求しようとしたものである。日本のアナキズムは、私を知る限りではこの「あやまりを卒直にみとめること」を行なわなかったと断言出来るような傾向

を持っている。ある点では「無定見な讚美」さえ行っていないのである。

日本社会主義同盟以後のアナキズムの敗北の行進に常に付纏っているものは、偶然的な出来事でもないし、敵の強大でもなく、実は「あやまりを卒直にみとめること」を放棄したことである。アナキズムはあらゆる現実を否定して、破壊して行く運動であるにもかかわらず、「あやまりを卒直にみとめる」という自己否定を放棄したのでは、他者の否定||破壊の行動は当然遂行出来ないことは当然である。

もし否定||破壊を失ったアナキズムが存在するとしたならば、それは自慰の思想であり、斗争からの逃避の思想であり、ただ懐古的な、老人だけの、ひからびた、反動と裏切りと革命家を自称する方便の固りであるはずである。実際私達はこの逃避のアナキストをアナキスト・クラブのなかに見出すことが出来るし、彼等が指導していた戦争前のアナキズムの敗北は目に見えて明らかだと言えらると思う。そして、その点だけに焦点を絞った時には私達はアナキストから転向した多くの人々に讚美さえ送ってもよいのである。

だが、日本のアナキズムの敗北は養老会のようなクラブの責任に帰するものではない。実は私達アナキスト連盟自身の内に敗北の要因もあるのである。この要因を探しだし、「あやまりを卒直にみとめる」ことなしには、敗北のみを歩んで来た日本のアナキズムを改革の行進の軌道に再び乗せることも、アナキイな世界を私の眼でみつめることも出来ないものである。

私はこの論文の大部分をこの過去のアナキズムの敗北の因子の暴露に当てるつもりである。だから、アナキズムを理解しようとする人々にとっては分りにくいことがあるかもしれない。だがその人々にとってもアナキズムは否定の運動であり、その否定があらゆる対象に向けられると同時に、自己に向けられるものであることを理解してもらいたいと思っている。

クロポトキンは「敵に打ち勝つためには、断頭台よりもっと以上のもので、恐怖政治よりもっと以上のものである。革命的思想がい」と言っている。この論文のアナキズムの敗北の因子の暴露は思想の問題に限っている。それも私の現在の力量によって、非常に概括的で、抽象的である。だから私はこれを契機にあらゆる問題に対する「あやまりを卒直にみとめること」を、今後多くの人々がより具体的に、個別的に行ってほしいと思っている。

勿論、いかなる論文も自己否定の行動であるに違いない。例えばある人の批判は、その人に向けられた否定であると同時に、自己におけるある人の反映した影の否定である。彼は機械主義者であると断定し批判するならば、自己の権威主義をそのままにしておくことは出来ない。もし自己が権威主義者でありながら、権威主義者を非難する論文を書くのなら、その論文はにせ物であり、その筆者は人間のにせ物である。だが、いかなる論文も自己否定の行動であるといっても、自己そのものに向けられないならば、自己の無意識な現実を固定するものを突放つことは出来ない。そして現在の日本のアナキズムは濫放つことが必要なのである。

「あやまりを卒直にみとめ」、それを突放つ「ためには、今私達の立っている一九六一年の日本アナキスト連盟をきつと見開いた眼で

凝視しなければならぬだろう。だが、私はこの凝視に堪えることが出来るだろうか。僅少な、しかもうすべらな連盟は自分自身をレントゲン写真にしてしまうように思われる。だがそれでも私達は凝視しなければならぬのだ。そのレントゲン写真を沈黙して眺めている医者の冷静さを私達は保ちながら、老朽した骨を見つけたし、その骨に思考の鋭敏な指先で手術を施し、私達が真のアナキストとして心に描くあの人々のすばらしい筋肉をその骨格につけなければならぬのだ。

今、私の前にあるレントゲン写真には幾つかの名前を知っている骨がある。バクニン・クロポトキン・ソレル・大杉栄・マルクス・実存主義等の骨の塊がある。私が概括的に抽象的に否定しようとした理論はこれらの人々の老朽した理論である。私はそれらの理論の老朽した骨を私の体軀からとりさるうと思っているのだ。私はなるべく整理しながらこれらの人々を個別的に検討して行こうと思っていたが、日時と私のにぶい思考はこんな雑談的な中途半端なものを提示するに止まった。今後連盟の人々と共に若いアナキストとしての論文を發展させるために努力することをちかかって読者の許しを乞いたい。

バクニンの叛逆と無体系

バクニンの生涯は非常に複雑怪奇なものである。しかもバクニンの思想も複雑怪奇なものである。ゲルツェンの急進的共和主義やネチャーエフの無道德的革命主義や、クロポトキンの倫理的アナキズムや、アナルコ・サンジカリズムや、ブルードン主義等々、私達の既成概念では規定できない不協和音の思想がバクニンの思想である。しかもこの不協和音がバクニン主義として心地よい響を私達に与えてくれているのである。この不協和音の心地よい調べは何か。こ

れが、バクーニンを現在に再生する質問であるべきだと私は考えている。

バクーニンに対してはロマンチズムによるB・H・カー等の解答や時折現われるネチャーエフによる解釈がアナキズム以外の人々からは与えられている。一方アナキストは例えばネットラウ等によって五十才以降の、それもネチャーエフによって強制された(?)思想を除いた思想がアナキストのバクーニンであるとされている。だが、ネットラウによるバクーニン論は事実や資料による批判以前に彼等の態度が批判されねばならないと考えるべきである。何故ならば一人の人間との共感全体性を持つてのみ可能であって、除くという条件は明らかにこの全体性を否定するからである。もし、その人間に対して除くという条件や限定した生涯によって自分が受け入れられる人間になるならば、その除くとか、限定とかの問題から出発してその人間の全体を否定することにより、自己において除くとか限定とかのない全体性をもった人間像を打ち立てねばならないからである。だからネットラウによるバクーニン論は実はバクーニンとの共感でなくて、自己の思想を単にバクーニンからのアナキズムと名付けたにすぎないものである。

バクーニンはヘーゲルの思想体系の一部である神の問題から、ヘーゲルの思想全体の否定まで展開することによって自己を確立した。それに対して近代の無政府主義者はバクーニンの思想の一部を限定してバクーニン主義とすることによって、自己の思想がバクーニンの思想全体と矛盾するにもかかわらず固定化する態度をとった。この否定的な態度と固定的な態度の相違が近代無政府主義の敗北の本質を形成しているように思う。だがここでは近代無政府主義の批判以前にバク

クーニンをなお追求することにしよう。

現代におけるアナキストの実存へのバクーニンの批判は、バクーニン自身の次のような言葉によってなされなければならないと私は考えている。それはバクーニンが自分とマルクスと、ブルードンとマルクスを比較した言葉にある独自のな部分である。

「マルクスは今でもやはりそうだが、当時は僕よりも余程進んでいる。余程どころではない。僕とは較べものにならない程学者だったのだ。僕は経済学をちっとも知らなかった。まだ形而上的、抽象論から抜け切っていなかった。そして僕の社会主義はほんの本能的のものにすぎなかった。彼は僕よりも若かったのだが、すでに無神論者であり博識な唯物論者であり、又考え深い社会主義者であった。彼が今日のその学説の基礎を立てたのはこの時代だったのだ」

「ブルードンは彼(マルクス)よりも一層よく、自由を了解し、又感得していた。ブルードンは、理論や哲学をいわないでも、革命家の本当の本能を持っていた。彼は悪魔を崇めて無政府を唱えた。マルクスはブルードンよりも、自由についてのもっと合理的な組織の上に理論的に立つ事は出来るかも知れない。しかし、彼には自由の本能がない。彼は徹頭徹尾強権主義者だ。」

この言葉はよくマルクスとバクーニンを比較する時に引用されている。大杉栄の「マルクスとバクーニン」という主論文も実際これらの引用を軸として展開されている。だがこの引用は直接にアナキズムとマルクス主義の対立の中に持ち込まれてはならないものである。

ところが多くのアナキストはこのバクーニンの独自の言葉をアナキズムとマルクス主義の比較の中に持ち込んだ。アナキストは自由の本能を持っていて、マルクス主義者は持っていない。この比較はそれ自

身としては正しいのだが、これから更にそれらの人々は経済学・哲学等諸科学、及び理論に対する軽蔑感を生み出した。バクーニンは自己の理論的貧弱さを否定しようとしてこの文章を書いたのだが、一部の後継者はこの貧弱さの再生産を自己の使命としたのだ。

これは国際的にアナキズムの潮流を毒している誤謬である。常に理論においてマルクス主義の後を追いかけるか、あるいは理論を軽蔑することによって全然理論的に後退するアナキストを数多く私達は知ることが出来る。だが私はアナキズムがバクーニンの貧弱な理論から現在まで前進していないといっているわけではない。サンシカリズムにおける諸理論はマルクス主義の限定を持った労働組合に対する理論に反して、自由な発展を示したし、その発展の恩恵は私達が反対するトリード・ユニオンにまで及んでいることは事実である。だが又クロボトキンが「近代科学と無政府主義」等で、近代科学を追求しながら、この書物があまり現代的意味を持っていないことも事実である。それは現実の諸科学の考察なしに、まさに自由な本能のみの場で独創的に思考を転回させたからである。つまり科学的な空想主義に落ち入ってしまったのである。

さて、私は先程自問しながら、答えなかった問題がある。それはバクーニン主義を一貫するものが何かということである。私はそれに対して「叛逆」だと答える。他の言葉で言えば、否定であり、破壊であり、反抗であり批判である。大沢正道の「バクーニンの生涯」によると、バクーニンは晩年「私の破壊への情熱は母の影響によるものだ。彼女の専制的な性格が自由に対するあらゆる制限への見境のない憎しみを私におこさせたのだ」と語ったと書いてある。この言葉は私にロートレアモンの「瞳への恐怖」やヘンリー・ミラーの「子宮」に対す

る反抗」という言葉を思い起させたのだが、それはそれとして、彼は自己を自覚した時から叛逆の塊りであったことはこの言葉からも理解できると思う。

彼の生涯の中で個々に別々に現われるヘーゲル左派的思想、急進的共和主義、ネチャーエフ的思想等々の思想は、バクーニンの生涯を絶対的なものとする「叛逆」の具体的な現象にすぎないものである。しかもバクーニンの叛逆は単に「権力」や「権威」や「他者」や「物的対象」や「国家」や「体系」という自己以外のものに対する叛逆のみならず、常に自己への叛逆が同時に行われているのである。彼はロシア問題||ドイツ問題||ポーランド問題や一八四〇年代後半の革命やリオン革命||パリ・コムニオン革命等の参加中で自己変革を特徴的にしている。彼は常に停止することなき叛逆者である。

彼はロマンチズム||ヘーゲル||フオイエルバハ||ブルードン||ヴァイトリング||ブルードン||マルクス||ゲルツェン等の思想に共鳴し、吸収し、孵化しながらその思想体系に固定化されることなく叛逆しているのである。彼の生涯の最後を形成しているアナキズムはそれ故叛逆の塊であって、体系や限界や固定化するものを持っていない。

バクーニンやアナキズムに対して体系がないという批判がなされている。だが私はこれに反対してバクーニンに体系があるとは言わない。彼の著作が常に中途半端で終わっていることから知られることは、彼の情熱が永続性がないためなく(彼の生涯は自由と連帯のための叛逆||破壊への情熱の永続であることから)理解されるようにこれは根拠のないことである)、彼が意識を物化・体系化することができなかったからである。この問題のみならず彼は体系に対して闘っている。だから無体系でないという批判は私達にとっては何ももったもない

う感想と同時に、その批判者を批判しなければならない情熱を生むのである。

体系は現実を固定化するものであって、変革するものではない。体系は資本主義社会の現実の構造の意識における反映であり、現実を変革する革命家にとっては、変革の対象になるものであって、意識として固定されるものではないのである。それ故アナキズムは批判者が時折指摘するように無体系である。アナキズムは現実に対して闘うと共に、現実の反映である体系に闘うものである。

ここにステイルナーの「無」の問題が登場して来る。叛逆は無であり、現実は何ら保持すべき固定化されたものを持っていない。「鉄鎖以外何も失なわない」革命はこの点から出発している。しかも、ステイルナーのいわゆる個人的無政府主義は先のような点で展開されていない。ステイルナーの思想はブルジョア個人主義の最後の最終的な思想として位置づけられるものと私は考えている。ブルジョア個人主義の最高のものであるが故に彼ステイルナーはブルジョア個人主義最高の思想は、だがブルジョアを否定しながらプロレタリア人間の解放に至る過程の途上で終ってしまっている。資本主義社会は水の沸騰のように自己を最高のものとすることによって破壊されるのだがステイルナーの思想は沸騰の過渡期のものである。この点で過渡期の思想としてのアナキズムと結合する。私はステイルナーを彼が無政府を述べたからという点でアナキストと名付ける態度は誤まりだと考える。アナキストにとってステイルナーが重要な位置を占めるのは、「唯一者とその所有」を一貫させているブルジョア個人主義の最高の思想である。だがここではステイルナーはさておいて、バクーニンと

無体系の問題にもどらう。

私はアナキズムが無体系であると言った。だが無体系は体系への叛逆から生まれるものである。現実への叛逆は現実をよく知らねばできない。それ故アナキズムにとっては現実とその反映である体系が対象にならねばならない。そこにおいて経済学||哲学||宗教学||?倫理学||芸術||自然科学等々の諸科学が私達の実存の中で重要な位置をしめてくるのである。

先に引用したバクーニンの文章を思い起こそう。彼はブルードンに対して自由の本能を持っていたと言っていた。同時にマルクスは自由の本能がないと書いていた。バクーニンが「自由の本能」と書いたのは実は叛逆である。だが叛逆の前提として対象をよりよく理解することが必要なのだ。そしてそれをある程度マルクスがなしていることをバクーニンは直感していた。彼自身とマルクスを比較する時、バクーニンはマルクスを「僕と較べものにならない科学者だった」と書いている。バクーニンへの否定||バクーニンからの発展はこの「学」||体系の認識の問題でなければならないのである。

マルクスは現実の反映である体系の認識者||理論家としては実際バクーニンより一段とすぐれている。彼の晩年の著作は虚栄心による憤激に満ちた反駁の論文にもかかわらず、現実の認識において、特に肉体労働の体系「資本論」は今迄にないほど最高の資本主義的完成をなしている。だがマルクスにおいては叛逆はない。真理を語っているけれども、実践的な真理ではない。彼は「資本論」に「経済学批判」という副題をつけ体系を否定する態度をとったが、それは結果であってそこから叛逆の行動を行っていない。ところがバクーニンは資本の分析||総合による資本主義的完成においてはあまり注意を払わずに、

感情的直感によって経済と経済の意識における反映である経済学に叛逆する。勿論直感は失敗する時がある。相続権でマルクスと論争した時は、彼が後に認めているようにバクーニンは誤っていた。そういう失敗はありながらも、彼は叛逆者であるが故に、また誤まりを認めることもできるのである。

だからマルクスとバクーニンの比較は次の様にいうのが一番正しいように思う。マルクスにとって結果であるものが、バクーニンにおいては出発点であった。だがマルクスが直に理論的完成を勿論なしているわけではないし、体系内にとどまって、体系に叛逆しなかったわけでもない。彼を革命家として認めることができるかぎり、彼は体系に対してバクーニンのように一貫してではないにしろ叛逆している。特にカーやレヴィットが指摘するように、若きマルクスとブルードンは一致しており、マルクスの青年時代は私達に大きな価値を持っている。

一方バクーニンもマルクスのな体系を認識することを忘れていたわけでもない。「神と国家」における観念論・ロマンチズム・科学・国家等に対する分析・総合と叛逆はある点ではマルクスより進んでいたことを示している。だが、彼自身が述べているように「マルクスは今でもやはりそうだが、当時は僕(バクーニン)よりも余程進んでいた」のだ。

だがバクーニンは「余程進んでいた」ということに自己の発展をかけている。にもかかわらず、バクーニンの後継者は、体系に対して考慮しなかった。彼等は後述するように相対主義的傾向と、この体系に対して考慮せず叛逆のみに心をそそいだために非常に倫理的にならざるを得なかった。大沢正道の「バクーニンの生涯」によると、彼は死

の直前に「集団の原理にもとずく倫理学的研究を著わしたい」と希望したそうだが、私には彼の生涯から倫理学を思い起こすことはできないから非常に奇妙に思えたのだが、仮に事実とすれば「自由」と「連帯」の二叛逆の論理を明らかにしたものと思われる。ところがバクーニン以後のアナキズム倫理学は非常に個人的である。それはある程度初期のブルジョア倫理学を思い起こさせるような傾向を持っている。

クロポトキンの「倫理学」は研究としての価値は持っているもの非常に平面的であり、聖賢の書を読むような奇妙な定理に満ちているように思われる。例えばクロポトキンの理論を形成している相互扶助も、もう一度バクーニンの「自由」と「連帯」へ逆もどりに更に追求する中で、階級的に再検討する必要があるのではないだろうか。何故ならば、石川三四郎以後、戦後の日本のアナキストが指摘するようにクロポトキンには革命に対して自然生的傾向が強く、この自然生的革命理論が社会斗争でなく労働者の教育という主張となり、この教育斗争理論は相互扶助という段階的傾向を持った倫理的規定に支えられているからである。だからクロポトキン主義の批判の一つは「相互扶助論」の批判でなければならないし、その延長としての「倫理学」の批判でなくてはならないのである。

バクーニンは実践の人であると多くの人々が言っているが、実践は常に認識と統一しなければならないにもかかわらず、バクーニンにおいてこの問題はある限界性を持っていた。この限界を否定する上に現代アナキズムは立たねばならないのだ。辻潤はどこかで自分は政治を知らないから政治が嫌いだと言っていた。辻はアナキストとは言えないが、近代無政府主義の一傾向を極端化すれば辻のような発言に帰着するのである。相手を知らないで反対するとするならば、それは失敗

するにきまつている。日本におけるアナキズムの敗北と転向者の続出はこの叛逆の対象を理解しなかったこと由来する。そしてこの傾向はそれを自覚しながらも、克服できなかったバクーニンと、その傾向を拡大再生産することが自己の使命だと考えた近代無政府主義者によって促進されているのである。現代におけるアナキズムはバクーニンの自覚しながらできなかった対象の認識に対する追求によって叛逆の再生を行わねばならないだろう。

過渡期としての連合主義

私はバクーニンを述べた後でクロボトキンとソレルを述べようと思っていた。だがバクーニンの次にブルードンに関する問題を述べることは無駄ではないだろう。完全に権力者になり切ってしまった共産党に対して反対するトロッキスト等のいわゆる新左翼・反スターリン主義者とアナキズムの交流がなされている現在、プロレタリア独裁と連合主義の対立は重要な問題であり、連合主義の主張者、アナキズムの母といわれるブルードンはここにおいて再び検討されることが必要であるはずだ。だが実は私はブルードンの「連合主義論」を読んではない。だから他の幾つかの論文からこれに近づかねばならない。だがそれも困難ではないだろう。というのはブルードンは自から自分のことを「逆説の人」といっているが、そのブルードンの逆説が著作のいたるところで現われてくることによって、彼の形而上的論理を私に知らせてくれるからである。

だが実はブルードンの逆説は表面的には支離滅裂という姿をとってくる。例えば彼は無神論を表明しているかと思うと、無神論者は信仰を持って人より非論理的であると非難することもするのである。

家族と同様に正義あるいは神聖な自然的存在と考えられ、この神聖な共同体の連合がブルードンの連合主義なのである。前時代的倫理観によるこの家族とそれの延長線上にある連合主義はだからある点では非常に自然発生的な、既存の、無意識的なものである。連合主義は実際プチ・ブル主義という非難と共に、前時代的存在として反対者に批判されているのである。そしてそれ自身としては批判者は私は誤りでないと考えている。

もっとも批判者は前時代的思考が現代において一つの抗議としての役割を果たすことを忘れていた。「自然に帰れ」とか、産業時代や、大衆社会に反対する声が強力な勢力を占めないまでも、現代社会における一つの抗議として、過去の遺物に依拠しながら、一方において変革的立場をもつことは可能である。そしてこのような意味においてブルードンの連合主義は革命性を保持しているのである。

だが革命性は全体性をもたない限り、現実全体の重さに潰されてしまう。たとえ一人の労働者がその職場で強力な反抗を示したとしても社会全体に対する反抗として斗われないならば、それはそれだけの反抗として押し流されてしまう。このような意味においてブルードンの連合主義は事実として敗北してしまっただけで、ブルードンの連合主義の敗北は連合主義自身の敗北ではない。

ブルードンに依拠しながら連合主義を發展させた人々は多数いる。バクーニンもその一人である。ブルードンの連合主義の敗北からバクーニンは「自由」と「連帯」という二つの言葉において連合主義を問題にした。がその意識裏にロシアの農民共同体を置いていたことも事実と思われる。だからバクーニンはブルードンの完全な否定者として位置づけるわけにはいかない。しかし「自由」と「連帯」という意味

もっとひどくなると、革命を非難していることもあるということである。しかし支離滅裂的な思考を一貫しているものがある。それは国家と権力に対しての批判と連合主義（フェデラリズム）である。このブルードン主義のまわりで支離滅裂な、逆説に逆説を行った主張がトゲのように生えてブルードンの広範囲な、老大な書物が書かれているのである。

ブルードンの「連合主義」を形成する共同体はパリ・コンミュンにおける共同体ではないと私は考えている。もっともコンミュンにおけるブルードン主義者の活動は明らかにあるし、ブルードンの連合主義とパリ・コンミュンの欠点とは一致したものを持っている。が彼の無政府主義を構成しているゴドウィンやワイトリング等を見ると、むしろ「正義」という倫理的問題から把握することが必要に思われる。

バクーニンとマルクスの論争の中で「相続権」という問題が中心点になった時があった。これはのちにバクーニンが自からいっているようにバクーニンの誤謬である。がこの時のバクーニンの主張はブルードンの相続税の非難をそのまま受売したものにはすぎない。ところでブルードンの相続税の非難は非常に奇妙である。彼は国家や権力や教会や財産に反対しながら、家族は正義であり神聖であるという矛盾した形而上的定義を前提として、相続税は家族の財産を国家に移転するため家族を破壊するとの理由で非難するのである。

この相続税の理論は「財産は窃盗なり」と宣言することによりスタートしたブルードンの生涯の最後のものであるが、この主張と共に、「連合制の原理と革命党再建の必要性について」（「連合主義論」）が書かれている。これからも理解されるようにブルードンの共同体は

で、個人と全体（社会）の統一とそこにおける個々人の分裂と統一を明確化しようとする主体的な態度は明らかである。ところが、クロボトキンはこのバクーニンの理論から、再びブルードンの理論へ逆もどりしようとしている。クロボトキンは中世の村落社会を念頭において連合主義を考えようとしたし、そこでは個々の人間存在よりも、共同体という一つのカテゴリーの思想的遊戯が重んじられている。彼の分散主義は、この産物の一つであるはずだし、生産と消費の経済学も資本主義における諸経済学と同様に、共同体という空想的社会に物化された人間労働を意識的に固定化したものに他ならない。だからクロボトキンの経済学が資本主義の経済学でなく空想的共同体の経済学であるゆえに、近代経済学に影響を与えないし、空想的だと非難されることになるのである。

連合主義は第一には政治経済的に解決されねばならない。そこでの解決は連合主義が過渡期のものであることの認識が必要である。ところが過去のアナキストは連合主義を無政府と同一視することからはじまっている。これは明らかにアナキズムの一部のとった逃避の態度と一致している。資本主義内での叛逆は叛逆でありながら、常に資本主義の栓を出ることができない。だから常に資本主義に叛逆しながら資本主義の影がうつってくる。ここに自己否定が成り立つし、自己内の不断の資本主義的要素に対する斗争が起るのである。これは連合内においても同様であって、連合内の自己否定は他連の否定と共に絶対的な無政府への接近として行われるのである。

連合主義と無政府を同一視する人々には、連合においては官僚主義等の腐敗が起らないと考えられている。何故なら連合に腐敗があるならば、無政府にも腐敗が起るからである。しかし「スペイン革命の教

えるもの」等を読めばわかるように、連合における腐敗はある。だから自己否定としての腐敗の否定の行動が蓄積されて、より純粋な絶対なものに近づかねばならないのである。このような意味において連合主義は過渡期の産物である。完全な無政府ではないのだ。

しかも連合主義には権力との問題が関連してくる。資本が権力であり、それが武器である限り、資本との叛逆は暴力であり、武器でなければならぬ。私はこの暴力をソレル的に用いている。ソレルは国家権力の力を強力と呼び、人民の力を暴力と呼んでいる。だがその暴力もプロレタリア独裁とかプロレタリア権力と名付けるものではない。勿論連合主義には権力とか独裁は起りうる。がこれは否定されるべき対象であって、それが起るからといってそう名付けることは明らかにそれを固定化するものである。だが独裁とか権力と言わないから、それを絶対に行わないというのは誤りである。パリ・コムミオンもロシア革命もスペイン革命もハンガリア革命も権力や独裁は起ったしある点ではそう名付ける行動を充分に行わなかったことが敗北の原因でさえある。だが我々がブルジョア的な行動を時々やるからといって自分をブルジョアと名付けないように、この権力的な独裁的な行動が連合主義において起るからといってプロレタリア独裁とかプロレタリア権力というものは誤りである。反対にそう名付けることは自己をそこに固定してしまい、ある点では内容が一致してもロシア革命のように実際は独裁と権力が恒久化し、逆転して党の独裁と党の権力になってしまふのである。

連合主義は過渡期のものである。だが過渡期、特に革命後の過渡期に対する政治経済的解答は連合主義では充分に与えられていない。マルクスは「ゴーター綱領批判」で労働証書制を過渡期の政治経済の基

礎にしているが、連合主義はクロボトキンによる収用・生産手段の社会化以上の問題に解答を与えていない。産業の地域的分散において分散した各連合間の問題や、賃金制・生産・分配計画等はいわれどもその基盤は明らかでない。しかもクロボトキンの自給自足の経済は革命による生産力の増大を逆転させるものである。マルクスの労働証書制は単なる一つの言葉だけで、ノルマ労働のスターリン主義者はこんなものを考えないので、内容は明らかになっていない。アナキストが今後考慮すべき問題でなければならぬだろう。

革命運動における知識人と労働者

連合主義は現在においてサンジカリズムの問題である。しかしサンジカリズムは言葉として存在しながら、理論として存在するまでに至ってないように思われる。現代においてアナルコ・サンジカリズムが我々の立場であるならば、この問題は非常に貴重であるはずで、労働者自身による労働者の解放としてのサンジカリズムはより深く理論化されねばならぬだろう。だがサンジカの問題に入る前に我々は労働者と知識人の問題を解決する必要があると思う。労働運動は革命運動でないという言葉がレーニンと共に、右翼クロボトキン主義者から発せられているのは奇妙なことだが、アナキストが労働者のみならず知識人を含み、ある点では我々が過去のアナキストとして名を知ることのできる人々が知識人＝ブチ・ブルであることはこの問題を解決することなくして前に進めないことを示していると思う。

更にアナキズムがブチ・ブルの理論として批判者によって非難されている時代では労働者と知識人との関係は重要な問題であると思う。知識人は何故革命家・変革者になれるのだろうか。マルクス主義者

のようにレーニンはプロレタリアであって、知識人ではなかったのだろうか。そしてレーニンと同様にプロレタリア革命を追求した人々はすべてプロレタリアであったのだろうか。これらの質問は今ままであまり発せられていなかった。何故なら自己否定そのものが無意識のまま遂行されていたからである。これらの間は自己からの超越とその超越による否定によって問わねば与えられないものであったのだ。そしてこれらの間が答えられないことから、革命的知識人が観察者にとりて正しかったときプロレタリアとして位置づけられ、誤りであった時はブチ＝ブルであったのだ。だが観察者も含めて多くの革命家は、そのような観察がいくらなされても大抵は政治経済的にはルンペン・プロレタリア等の中産階級に他ならなかった。労働者出身であっても職場を追われたり、亡命することによって我々が知りうる革命家は多くこの意味でブチ・ブルである。だがそれだからといって一部のサンジカリストや労働者の革命家によって言われるように、ブチ・ブルだからそれらの人々は革命家でなかったのだろうか。

これらの問題を考えるためには我々は疎外の問題に到達せざるを得ない。意識と行動＝理想と現実＝肉体と精神＝土台と上部構造＝個人と全体（社会）等々の人間性そのものの分裂＝分割＝分草に我々は到達せざるを得ない。本質的には人間は人間そのものであって、資本家と労働者等々の斗争は非人間的の世界＝人間史以前の世界である。にもかかわらず、人間は自然的に生産力と生産関係の発展の中からこのような二元的世界に分割されてしまっている。

人間性の獲得として行われる革命運動はそれゆえ二元的世界から一元的世界の追求として行われる。この点では観念的ではあるが、新約聖書（二元的）から黙示録（二元的）への追求をめざしたロシアの

テロリストの理論はここでは問題にはしないが重要である。一元的世界といっても、資本主義の固定家たちは、自由・平等等の観念によって資本主義を一元化している。だが資本主義の現実には資本家と労働者のように二元化している。そこで疎外された人間が疎外を意識できるのである。自由・平等が現実には行われていないことから、自由・平等を現実化しようとする変革者の最初の意識になるのである。勿論この意識は種々なかたちをとってくるが、例えば初期の社会主義者が自由主義者から生れてくることから理解されるように、社会主義思想は自由主義的観念を現実化しようとするなから生れてくるのだ。このことを示す代表的な言葉はマルクスの「ヘーゲル法哲学批判」の「哲学はプロレタリアートを揚棄せずには実現されえず、プロレタリアートは哲学を実現せずには自己を揚棄できない」である。

このように社会主義は資本主義的観念の現実化の中に自分の端初を見出している。だが観念を現実化するならばその観念は観念でありえない。同様に観念が現実化された現実はその以前の現実ではありえない。だから社会主義は人間それ自身の世界であって、その人間が資本家や労働者や哲学者や芸術家等々に分業・分割・分裂化された世界ではないのである。

しかし問題は現在、社会主義ではなく資本主義である。資本主義のイデオロギー（観念）の担い手である知識人はイデオロギーを現実化しようとすることでイデオロギーに反逆する。このことは知識人としての革命家がイデオロギーの知識に反逆する知識人であるということと、革命家は自己の場で闘うものであることを示している。同様に革命的労働者は労働に反逆する労働者である。だから労働の拒否が斗争として行われるのである。知識に反逆する知識人と労働（肉体労働）

に反逆する労働者が革命家として一致するのである。というのは精神と肉体＝精神労働（イデオロギー）と肉体労働が二元化し、分業化している資本主義社会では一元的・分業化していない人間を追求するためには、できるだけ統一を求めなければならないからである。それ故革命的な労働者は普通の労働者の生活以外に諸理論を学ぶという無駄な努力をしなければならない。革命的な知識人は知識人としての仕事以外に無駄な労働をしなければならないのである。

だが先に述べたように反逆は自己の場で行われなくてはならない。労働者は生産点で反逆するのであって、他の議会や酒場ではない。何救なら生産点にあることが労働者であることなのだからだ。同様に知識人も知識の場で反逆しなくてはならない。イデオロギーは体系化され、その場で諸々のイデオロギー体系を生み出している。カント主義・ヘーゲル主義・新カント派・プラグマティズム・実存主義が入れかわり、立ちかわり登場してくる。これらの諸体系に体系を実現化するため、即ち体系を揚棄するために、無体系の立場に立つて常に否定しなければならぬ。しかし、このように現代社会は抽象的には図式的ではあるが、規定は勿論知識人と労働者を兼ねるような人々がたくさんいる。がこの人もやはり、知識人として、労働者として疎外されており、ただその分業化された姿が二重になっているのに他ならないのである。

知識人としての革命家は知識の場で反逆する人である。知識に反逆するためには、知識そのものを知らなくてはならない。知識人である革命家が知識に反逆することは知識をより知り、それに反逆することと共に、自己の知識の反逆でなければならぬ。それならば、他人をプチ・ブルと批判することでありたと考える考え方は誤りである。新たに前進しなければならぬのである。

これはアナキスト全般にわたることだが、現代のアナキズムは破壊と建設の中の建設に重点を置いている。これは明らかにロシアやスペインでの敗北が、建設的分野での敗北として理解されているからだろ。建設的分野といっても、これは教育に重点を置く考え方や、サンジカ等の組織に重点を置くもの等幾つかに分かれている。だが彼等は第一に破壊と建設が同一のことであることを忘れている。現代における現実の拒否は無である。何等我々は現実の中に守るべきものを見出してはいない。そこに反逆・破壊が誕生するし、そしてこの反逆・破壊に死と生のように建設があるのである。

ところが多くのアナキストはこの破壊と建設を平均的に分割した。そしてこの分割によって敗北に敗北を重ねるような事態をもたらしているのだ。例えば、先に述べたようにアナキズムはなお権力に対して激しい態度をとっていない。彼等は権力を破壊するよりも、未来社会の組織、サンジカ・コムミュン・ソヴィエット等々を建設することが大切だと思っているのだ。ところがロシアやスペイン革命での敗北はこの組織を建設しなかったことだけでなく、権力に対して充分に闘わなかったことが原因なのである。ロシアにおいても過去の権力機関を完全に破壊しなかった。このためにこの官僚的國家技術者が独裁制の支えとなって登場してくるのである。スペインにおいてもそうである。彼等は一九三六年において政府を打倒できたにもかかわらず打倒しなかった。サンジカの組織があれば未来は天国だという考えを持っていたのだ。

同様のことは政治に対しても行われた。我々が政治斗争を行わないということは政治的中立主義を意味するのではなく、政治に反対する

る。なぜなら、プチ・ブルという批判は知識に反逆する知識人に何にも役立たないからである。だからアナキズムに対するプチ・ブルという批判は無意味である。そうであるならばレーニンもマルクスもトロツキーもプチ・ブルである。批判はその人がプチ・ブル性を対象と共に自己に見出し、それに反逆したかしないかという点にあるはずである。それに反して、他人をプチ・ブル理論と決めることに満足する人（マルクス主義者）は、自己のプチ・ブルを見つめていない故に、他者は否定しても自己を否定しない中途半端な変革者＝革命家として批判されなければならない。知識人としての革命家は自己をプチ・ブルだという認識を持たねばならない。そしてその自己のプチ・ブルと闘うことにより変革の運動が可能なのである。その点ではサルトルの自分をブルジョアとして見つめる態度を、我々は学ばなければならぬ。そして自分がプチ・ブルのくせに、他人をプチ・ブルだと批判して満足している人々と斗わなくてはならない。この自己の認識とその否定なしには一つの抑圧制度を變革しても、自分がもう一つの抑圧制度をつくり出すはめになるのである。

眞の叛逆としてのサンジカリズム

サンジカリズムに対して、二十世紀初頭の一時的現象とか、ラテン諸国の法人的労働者のものであって、産業労働者のものではないといふ批判がある。私はこの説に勿論反対するが、理由のない考えでもないと考えている。何故なら現象的には明らかにこのことは示されているからである。実はある点ではサンジカリストがこれを認めないことが、一つの理論的弱点を形成しているときえ思われるのである。何故ならサンジカリストは自己の敗北を認め、まさにその敗北の中から、

生産点における斗争をすることを意味していた。にもかかわらず第一次大戦前のフランスではゆるゆる経済斗争を行うだけで、政治には反対せず、中立主義を保っている。経済斗争も我々が用いているのは生産点での闘いという意味である。にもかかわらず、単なる賃上げ斗争が経済斗争を意味するように考えられている。勿論これらの考えは革命的サンジカリズムでなくて、中立的（改良主義的）サンジカリズムのものである。しかし、このような考え方が革命的（アナルコ）サンジカリズムにないわけではない。サンジカとは①日常斗争機関②資本主義制度打倒機関③未来社会の基礎組織の三重の性格を持っているという意見が一応認められているもの、二番目の資本主義制度打倒は非常に抽象的な分野でとどまっているし、この三つの性格は平面的に扱われている。P・サンソムの『サンジカリズム—労働者のつぎの歩み』では政治的戦術はたんなるおしゃべりにすぎないというようにところが書いてある。

ところで日常斗争は本質的な意味で常に敗北である。資本主義が打倒されない限り、労働者の斗争は敗北である。しかし日常斗争は現象的には勝利もある。それは日常斗争が本質的に敗北であるという次元ではなくて、現象的に資本家か労働者かどちらが先に妥協するかという点である。資本家が妥協するというのは、もちろん労働者の要求が自分の有利になるという点で行われるのだが、斗争の現象的次元においては勝利である。そしてこの勝利を更に労働者が拡大させるか、それとも資本家が妥協するという敗北を行うことで労働者の斗争を静め、更に抑圧するかということがその勝利の次の問題になるのだが、このような現象的勝利は我々が資本主義を打倒できない現在では必要なことである。その意味で政治的戦術・戦略等が必要になってくる。このよ

うな点でサンソムの破壊そのものの内容の不充分があるし、更に、「われわれがバリケードについて語らず、社会革命は産業上の行動によって成果をあげることができる」ということを読むと、明らかに破壊を忘れて建設のみに注目する傾向を読みとれると思う。何故なら、バリケードと生産の社会化とは違う次元のことであり、バリケードは生産の社会化の過程(社会革命)では現象的な問題であるからである。ある権力の暴力は武器であり、武器は生産一般の問題であり、この意味でバリケードそのものは社会革命の一環として、更に革命そのものの中では非常に重要な問題なのである。このような平面的な、経済主義が現代のアナルコ・サンシカリズムの著名なプロバガンディストP・サムソンにあることは、明らかにまだロシアやスペインでの敗北がアナキストに十分自覚されていない証拠に思われるのである。

先のバリケードと関係あることだが、反戦斗争にも同様なことが起っている。アミアン憲章は「あらゆる罷業において、軍隊が資本家側につき、またあらゆる国際戦争や植民地戦争において、労働者階級がねに欺瞞され、寄生的資本家階級のために犠牲にされている」と書いてあるが、これは軍隊そのものを、その後の斗争から見ても明らかのように、労働者自身の側に立たせることを忘れていた。しかも戦争が労働者の抑圧でなくて、欺瞞という第三者的態度としてあつていく。この第三者的態度はマルセーユ大会宣言の「国際的見地よりみて列強間に戦争が起った場合、労働者が、革命的総罷業の宣言を以てて宣戦布告に答えるように、労働者を教育すべきである」という点でも明らかにされる。この言葉はレーニンの「戦争を内乱へ」のスローガンの前にひざまづかねばならなくなっている。すしわち布告に対してゼネスト、そのための教育という明らかに消極的な反抗しかできない

立入っていないように思う。もし彼が我々の思想に全く正反対であるうと、敵としてよく知らねばならないはずである。が、敵としてもよく知られていないように思う。E・H・カーやレヴィットはブルードンと青年マルクスの理論は一致していると書いているが、このような発言が良識的知識人から行われている現在においては更により探求されねばならないだろう。

マルクス主義は自由に対して鋭い分析をやっていない。多くはエングルスの『反デューリング』の「自由と必然」という言葉のカテゴリの遊戯に終始している。ガロディーの『自由』などそのよい見本である。だがマルクスは「ユタヤ人問題によせて」で「市民社会は、各人をして他人のなかに、各自の自由の実現をみいだせずに、むしろ各自の自由の制限をみいだせる」と書いている。これはバクーニンの「わたしは他人の自由で制限されるどころか、逆に他人の自由によって確保され、無限に拡大されるこの万人の自由を心に抱く」という言葉と完全に一致している。この自由に関することばかりでなく、宗教・国家・哲学に対する態度もバクーニンと青年マルクスは完全といつてよいほど一致している。

このアナキズムの理論と一致したマルクスの思想が崩れて行くのは『ドイツ・イデオロギー』のステイルナー批判からであるそれ以前においてはマルクスは全と個の一致した人間が疎外されて、全と個が分裂して行くことをある程度把握していた。しかし、ステイルナーの私の分析の批判から個の分析を忘れて、全のみの分析に移って行く。『ドイツ・イデオロギー』以後の論文が政治的論文を主軸として書かれているのはこのためである。勿論私はこのマルクスの転換期を充分に理解しているわけではないが、「哲学の貧困」等のそれ以降の論文

のである。戦争は明らかに生産一般の問題である。戦争は消費の極限であって、生産から分離した空に浮ぶ雲ではない。この点において殺人等の問題のみならず労働者からの搾取、生産一般の問題として把握しなければならぬのである。だから生産力と生産関係を自分のものとするという社会革命としての意味で、労働者は戦争を自分自身のものにすることができるのであり、これが戦争から完全な平和と社会主義へ、そしてそこに革命が成立するのである。レーニンはこの意味では明らかに正しいのである。だがレーニンがいうような民族自決という民族主義的傾向は批判されなければならないし、彼の「戦争から内乱へ」のスローガンの内容となっている『帝国主義論』は国際主義を失ってしまったことだから批判されなければならないだろう。この批判は、アナキストは書いていないが、レーニンがアナルコ・サンシカリストのだと非難したローザ・ルクセンブルグの『政治論文集』や『資本蓄積論』はその批判の重要な参考文献となると思う。

私はサンシカリズムにもっと多くページをさかねばならないだろうが、枚数が限られているのでこの項をここで止めようと思う。サンシカリズムは先に書いたように、未来社会の基礎組織として考えるのではなく、資本主義に対する真の叛逆としてとらえなくてはならないというのが私の主張である。何故なら私達はこの資本主義社会に鉄鎖以外なものも失わないのであり、この意味で未来社会の建設は資本主義制度に対するたゆまぬ破壊の中から同時に生まれるものであるからなのである。

絶対的なものへの追求

我々アナキストはマルクスに対して(マルクス主義ではない)深く

と青年マルクスの論文の理論的矛盾は単に理論的發展とは違ったものと思わせる。この転向を分析するなかでマルクスの批判が出てくるのではないかと思う。プロレタリア独裁の問題にしても、私は『フランスの内乱』を読む中である程度バクーニン等と内容の点で一致するしバクーニン等よりも正しい立場であることもわかるので、現象的にはそれほど違はないと思う。しかし、内容では一致しても、我々は独裁とか権力とかを永久化しないために、自己を固定化する用語をさけねばならない。言いかえればこのような用語を使うことから、彼の意識そのものを問題にしなければならなくなる。もっと進めば彼は自己に対する否定の態度がなかったように思う。彼の主体性は不変で固定したもののようになっていく。だから労働者(＝マルクス)は教治運動をしなければならぬし、労働者(＝マルクス)が資本家を打倒した後(革命後)は自己を固定化するためにプロレタリア独裁を行わなくてはならなくなる。このような点で彼は自己のプチ・ブル性を認識し否定しようとする態度をあまり持っていない。常に自分は革命的で正しいと考えられている。これがマルクスの伝記によく出てくる虚栄心を形成しているようだ。このようにマルクスの否定に対象のみに向けられる傾向を持っている。自己否定のない革命家は実際上は遠慮勝ちな反動家のようなものだが、マルクスにもこのようなものがみられると思う。だがマルクスの対象に対する否定・叛逆は非常に確実である。この対象(特に政治・経済)に対するマルクスを学びながら、現代アナキズムは自己と対象への叛逆を展開して行かねばならないと思う。

ここにマルクスとバクーニンを本質的に統一させているものを書くことは無駄ではないだろう。それは絶対的なものへの追求として彼ら

の理論と実践が行われているということである。それは相違はありながら真の人間性への追求ということが基礎となつていからである。人間の自己疎外は実際この人間性への絶対的追求めしに把握できないのである。絶対的追求めとは全体主義における限定された内容を一つの絶対的なものに祭りあげてしまうことではない。永久的な人間性への追求なのである。それ故、これは全体性への追求である。これも勿論、一つの部分的な真理を、絶対的なものに描定し、これが全体性であるという全体主義のものではない。全体主義は人間の全体的な実現に對立するものであって、偽全体主義である。

先に述べたようにバクーニンもマルクスもこの絶対的なものへの追求、あるいは全体的なものへの追求を行っている。ところが、近代無政府主義の多くのアナキストはこの人間性への追求を相対的なものに転化させてしまっている。というより相対的な思考の上で絶対的なものを固定化しているのである。この代表的人物はアナキストとしてはクロボトキンである。彼はダーウィンの弱者と強者というような相対的観点でもって思考を展開している。しかし相対的な思考はそのままでは政治的にならざるをえない。政治は常に同盟を結ぶか、結ばないか等を相対的な価値において判断しているからである。だからクロボトキンはこの相対的なものなから絶対的なものを持つてくる。それが相互扶助である。そしてこれを固定化するのである。弱者と強者は互いに助け合わねばならない。このような倫理において彼は革命を把握しているのである。ところが相対的なものから絶対的なものを求める時には、相対的な現実を客観的にながめねばならない。そこでクロボトキンは客観主義に落入ってしまうのである。

この相対主義(クロボトキン)の現代における後継者はカミュである。カミュは「反抗的人間」の中で、相対主義的分析を試みた後、「中庸」という客観主義的な価値を引き出し、これによって反抗を規定する。相対主義は結論において超越的・逃避的である。超越的であることは完全に純粹で至高で美的である。クロボトキンやカミュの論文が非常に美しいのはこのためである。しかし相対的な価値法則の現実の中から絶対的なものへの追求を行わないで、相対的な現実の上に絶対的なものを見出す態度は、主体性を失った状況外で単に眺めているにすぎない逃避者の態度である。

カミュが問題になったのでサルトルにふれておけば、サルトルの態度が非常に矛盾しているのに気付く。彼は主体性を語る時には絶対的なものへの追求をめざしている。ところが社会的条件を語るときは相対的なものを追求する。勿論現在の資本主義的社会は相対的条件である。それ故、絶対的条件である人間性への追求を我々は行うのである。それに反してサルトルは手品の箱のように二重に底をつくり、人間性への追求は主体性では絶対的なものを見出しながら、社会的条件では単に相対主義的結論しか引き出さないのである。だからこそ、現在の労働者は共産党を支持しているから、我々は共産党を支持しなければならぬという相対的な態度しかとらないのである。このサルトルの矛盾した相対主義とカミュの相対主義は他のフランス知識人とも共通することで、レジスタンス運動という統一戦線に原因はあろう。統一戦線は政治的で、相対的で、フアッシュヨには統一して闘ったが、その後は分裂して斗わなければならぬのである。

現代の思想の中では、実際は人間性への追求がなされていると言われているにもかかわらず、実はカミュやサルトルを見てもこのように誤まつた方向への追求しかされてないのである。共産主義は勿論政治的なものだ。だが我々はその美しさを更に探求することでもっとすばらしい美を見出すことができる。しかし単にアナキズムの美の直感とか若き時代における美の認知への懐古だけに我々が終ってしまうなら、それは現実の醜くさの中で敗北してしまうだろう。

だからこそ我々は美をより美しく、しかもより普遍的にするための活動をしなくてはならない。そこにあらゆるアナキズムの理論の総括が必要になってくるし、その中から我々の現代アナキズムの展望が開けてくるのだ。私はこの雑話的な論文の中でその一部を示そうと思つた。叛逆・自己否定・連合主義・無体系・プチ、ブル性・権力・絶対性等の問題をバクーニンやマルクスやクロボトキン等を通じて探がしとめようとした。それも不十分であり、まともでないものになつてしまった。また特に扱いたかつた大杉栄の問題を抜いてしまった。私は日本のアナキストとして大杉栄を批判しなければならぬと思つている。それも社会運動史研究者や社会思想家がアナキズムへの偏見の上でデッチ上げた批判ではなく、大杉栄の理論を發展させる方向での批判をやらなくてはならないと思つている。これ等の課題は今後徹底的にやろうと思つているし、やらねばならぬだろう。

最後にこのことだけは書いておこう。アナキズムは敗北したのだ。それは革命運動の諸潮流の中で相対的な敗北だけではなく、それ自身として自己崩壊したのだ。アナキズムは権力が強かつたから敗北したのではない。何故ならアナキズムはどんなに強力な権力でも斗えるものでなくてはならないのだ。アナキズムは自己が拡大的な發展ができると同時に、自分で崩壊するものだ。そして現代の敗北は自己で敗北したものだ。この敗北の自覚の上で、アナキズムは自己の再生を行

おわりに

現在、日本のアナキズムはバクーニン主義を呼んでいる。だがそのバクーニン主義とは一体何なのか、誰れも答えていない。バクーニンがスペインのCNTのアナルコ・サンシカリズムにおいて大きな役割を果たしていたという点だけからバクーニンに注目している傾向も見うけられる。だが我々の思想がそれでこと足りるとしたら大きな誤りである。アナキズムは無体系でありながら、反体系として体系よりも強固な力を持たねばならないのだ。しかし今までのアナキズムがその強固さを持つていたと断言できる自信は我々にはない。持たねばならないということ、持てなかつたということの間には我々が黙々として過去のアナキズムを継承してゆくことをゆるしてはいけない。我々は過去のアナキズムに對して徹底的な総括が必要である。革命運動の基礎は理論である。この理論そのものを我々は徹底的に総括しなければならぬ。

わなくてはならないのである。生物に死がなければ生もないのと同様に、アナキズムは敗北の自覚なしには再生はありえない。我々はすべ

ての過去のアナキズムへの批判の中から、再び、革命の刃を取り出さねばならないのだ。

特集・現代とアナキズム

プロレタリア独裁と連合主義

大沢正道

ところによれば、このような問題を最初に提起したのは、ロシアのアナキストたちであったという。「一九一七年のロシア革命とともに、建設の問題がロシアばかりでなく、世界各地のアナキスト団体での思考を支配しはじめた。なかでも真先に建設的アナキズムの路線を追求したのはアナルコサンジカリストであった。」

一九二六年九月六日、史上最初のアナキスト・インターナショナル大会といわれるサン・ティエ大会五〇周年を記念する集会が、スイスのベルンで開かれた。この集会には国際的に知られているアナキストたち、たとえばベルトーニ、マラテスタ、ファブリらも参加したと伝えられるが、その討論の議題は次のとおりであった。

1、いかにして旧秩序を打倒し、破壊するか。
2、いかにして新権力の創造の結果として現われる革命の没落を防止するか。

3、いかにして経済生活の持続と再建を確保するか。
この集会での討議とその結論がどのようなものであったかについては、資料がないので分らない。わずかにマラテスタの「無政府主義組織論」がそれに関連するものと推定されるにとどまる。

しかし、G・P・マキシモフがその著「建設的アナキズム」で説く

「いわゆるプロレタリアートの独裁は革命的、人民の手中にある道具以外のなにものでもあってならない。」(傍点筆者)。シャビロはすぐ続いて、独裁は特微的に専制へと傾斜するゆえに、「したがってプロレタリアートの独裁は決して存在しえない」と断定するのだが、さらに反転して、こう述べている。

「……階級斗争の状況が労働者階級が先頭に立ち、他の諸階級がおくれるようになった時、他の諸階級はつねに彼らの所有を取り戻そうと務めるであろう。そこで責任を遂行するのはプロレタリアートの小部分となるであろう。しかしこれをなすうるのは党ではない、コミュニストでもアナキストでもない。党は知識、理論的基盤そしてまた偉大な理想をもつが、変革の精神をもたない。党はつねに必然的にドグマ的たらしざるをえない。」(傍点筆等)

「プロレタリアートの小部分」は、これを「プロレタリアートの前衛」と言い直してもよいだろう。シャビロのこの認識が革命の過程において提起されたものであることを忘れてはならない。シャビロの発言をもう少し聞こう。

4、社会革命は経済革命である。資本主義の絶滅および労働者による全産業と経済生活の管理である。敵階級は国家の形体には少しも留意しない。それが留意するのは資本主義であり、経済制度であり、諸工場等々である。この立場から社会革命の最も自然で最も適したくない手は、革命的な労働者組織、組合である。これらの参加なしに社会革命は成功しない。

5、この立場でせいぜい言うことはプロレタリアート内の革命的労働者組織の独裁である。革命的諸政党が革命的プロレタリアート

一九一八年にクロボトキンが新聞「パンと自由」のなかで、「われわれはわれわれが考えたように豊かでない」という事実が、アナキズムを「補足的な思想」の分野へと入らせたといひ、問題はもはや「破壊しながら創造するであろう」ではなく、「創造しながら破壊するであろう」にある、と述べている。

おなじ年の八月二五日、アナルコサンジカリストたちは革命後最初の大会を開催した。全ロシアアナルコサンジカリスト連合大会がそれである。この大会で採択された六カ条の決議が、革命中のロシアのアナルコサンジカリストの立場をもっともよく示しているといわれるがこの決議へのA・シャビロの補足説明には、きわめて重要な問題が示唆されている。A・シャビロはモスクワのもっとも著名なアナルコサンジカリストの一人である。彼は十カ条のこの説明のなかで、プロレタリアートの独裁に注目している。

大衆のなかに深く押し込まれば押し込まれるほど、過渡期はそれだけ短くなるであろう。

6、最初に問題になるのはプロレタリアートの独裁ではなくて、革命の社会的成果を保持するためにプロレタリアートによって創りだされた団体の建設である。プロレタリアートへの一党独裁は魂の抜けたメカニズムを導入する。なぜなら党は規律の原則を認めるが、真の生活の戦術を認めないからである。

7、ドグマ的な、機械的な党独裁はドグマ的な、機械的な集権主義を導入する。党はこれ以外の方法で一団の経済生活を管理することができない。ドグマ的な、機械的な集権主義はあらゆる発意を殺し、それが築き上げる以上に打ち壊す。その特徴は破壊であり、建設ではない。」

ここで提起されている問題は「一党独裁の否定」と「革命的労働者組織、組合の独裁の消極的な肯定」である。ロシア革命当時、労働者独裁の思想がおもにアナルコサンジカリストの間に擡頭してきたことは、ナバト連盟はウクライナにおけるアナキスト団体で、マフノ運動に密接に関連しているが、ナバト連盟自身はマフノ運動を革命的だがアナキストの運動ではないと宣言している。ここに引用する決議は一九二〇年九月初めハルコフで開催された同連盟最後の会議で採択されたものだ。

決議は、アナキズム理論の基本原則はロシア革命の過程においてその正しさを確認したとする立場から、「過渡期」という用語をその事実は承認しながら、すでにマルクス主義の公用語になっているという理由で否定し、マルクス主義に影響されているという理由でサンジカリズムに反対し、続いて次のように述べている。